

---

## 緊急被ばく医療調整会議の立ち上げ

(鈴木文男ほか、広島大学 東日本大震災・福島原発災害と広島大学、2013、p. 19-23)  
2013年9月9日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

平成 23 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災にたいして、翌 12 日、緊急被ばく医療チームのメンバーとして被災地に赴いた、放射線研究者、生物学者、医師、看護師たちが体験談を各々述べている。

活動内容はそれぞれ異なっている。放射線医学総合研究所で現地の情報を収集するとともに今後の救済活動を決定していく者、実際に被災地現場で避難者のスクリーニングを行う者、医療対応を行う者と様々であったが、全員共通して、今回の未曾有の大災害を想定できていなかった政府、そして自分たちの危機管理の甘さを理解するとともに、己の無力さを痛感している。たとえば、震災後政府の認定した避難区域の拡大に伴い、多くの住民が避難を余儀なくされたが、自分で歩くことができない者や、高齢者で要介護や寝たきりの人々の避難がうまく機能せず、多くの人間が命を落とす結果となっている。もし今回の震災のような災害を想定して、危機管理体制がしっかりしてマニュアルが確立していれば、このような人々を救うことができたのかもしれない。

今後、このようなことがあってはならないが原子力発電がすぐに廃止にならない以上、政府の危機管理体制、各医療機関の緊急医療体制を改善する必要がある（緊急被ばく事故発生時には十分な非常食や放射線防護機器などの確保と派遣者が独自に行動・活動できる交通手段を準備すること、など）。そして、国民一人一人が今回の震災から考えさせられたことを今後に活かしていく必要がある。